

平成29年9月4日



根堀台だより

第 49 号

校訓「進歩(文)」「健康(武)」「協力(道)」

日枝神社祭典 由利中生頑張りました



9月3日(日)、前郷で「日枝神社例大祭」が行われ、本校からは、「小旗持ち」1名、「大太鼓」3名、「賽銭箱」2名、「御大榊」6名、「巫女」2名、「御獅子」2名、合計16名の生徒がお祭りに参加し、華を添えました。

天気予報では当初雨の予想で、巡幸の途中一時的な雨もありましたが、無事に祭典を執り行うことができました。また、吹く風は爽やかな秋の気配でしたが、日差しが強かったこともあり、体力的にも結構きつかったようです。力を使い果たして、大分疲れた子どももいたようでした。

左記の「秋田魁新聞」の中に、「祭りは前郷がひとつになる特別な日。少子高齢化により人手不足だが、町内同士が協力すればまだまだできる。絶やすことなく続けたい。」と、当番町の氏子総代人さんのコメントが書かれていました。

祭りの後継者不足は由利地域だけでなく、由利本荘市内各地でも大きな問題となっています。祭りに関わりのない他の町内からの応援や、帰省者とその家族に依存しながら、祭りを続けている地域もあります。

日本では古くから、その地域を守る神様がおられると信じてきました。これを「氏神さま」と呼び、どの地域にも必ず「氏神さま」が祭られており、その地域に住んでいる人々は、その「氏神さま」の「氏子」となります。そして、「氏子」は毎年、決まった日に「氏神さま」のお祭りを執り行い、それを「例祭」と呼んできました。お祭りに参加することは、氏子同士が互いに強く結ばれるという意味があります。また、祭典は地域住民が互いに支え合い、助け合うことを学ぶ場でもあります。震災や豪雨など、自然災害で大きな被害を受けた地域を見れば、地域のつながりや「互助」の習慣が大きな力になっていることがよく分かります。

今回、祭典の途中で体調を崩した子どもがいました。すると、玄関に運んで濡れタオルで看護してくれたり、声をかけてくれたり、保護者にも連絡を取ってくれました。自分たちのよく知らない子どもであっても、本当に親身になって心配してくれる姿に感動しました。

地域住民がお祭りに参加することによって互いに強い絆で結ばれ、地域社会がひとつにまとまることは勿論ですが、由利地域は人と人のつながりがある地域だからこそ、こうやってまだお祭りが継続できているのだともいえるのではないのでしょうか。お祭りでは沢山の保護者の皆さんが参加されていました。地域社会での大人の姿を通して、子どもたちは将来の自分の姿をしっかりとイメージできたことだと思います。

本校の子どもたちが将来どれくらいこの地域に残ることができるのか分かりません。けれど、由利地域にあっても、よその地域にあっても、人と人をつながりを大切にできる大人になり、その地域の伝統や文化を大切にする人になってほしいものです。そして、たとえ由利から離れて暮らしていても、自分が生まれ育った地域の祭典がある日は地域に戻って来て、地域の仲間と一緒に祭りを続けていってほしいと願っています。



獅子こが来校しました



ニューフェイスの獅子こ2人



熱心に見守る由利中生

9月4日(月)の午後1時15分ころ、3人の可愛い「獅子こ」が来校し、全校生徒の前で踊りを披露してくれました。前郷日枝神社祭典の折に、演じられる「獅子こ踊り」ですが、かつては旧上町の4町(上町・仲町・神町・小友町)それぞれに「獅子こ」があったそうですが、現在では小友町の1町の1組しかありません。

赤の獅子頭を付けたのが雌獅子、青の獅子頭を付けたのが雄獅子です。各々が腰に太鼓をつけてこれを叩きながら、跳躍をしたり、腰をかがめたりして激しく動きながら舞うのが特徴です。昨年までの「獅子こ」2人が中学生になったので、今年から新たに2人の踊り手が加わり、小学4年生3人での「獅子こ踊り」となりました。少し小柄な「獅子こ」ですが、その分身軽で、高く跳躍し、躍動感溢れる踊りを見せてくれました。

全校生徒が由利小の後輩たちの頑張りを大きな拍手で称えてくれていました。このように地域のお祭りの催しが、毎年学校という場で披露されることは大変珍しく、改めて学校と地域の間につながりや絆の深さを実感しています。鮎川や西滝沢の子どもたちにとっても、他地区の伝統文化に触れるよい機会となっています。